

第三章 卒業・そして上海

大学の掲示板に愛媛県の離島教師募集の張り紙を見た時、お能ちゃんは夏目漱石の「坊っちゃん」を思い浮かべた。「赤シャツ」、「のだい」、「うらなり」、多様なキャラクターの教師たちを巻き込みながら痛快に物語を展開していく坊っちゃんを自分になぞらえてみた。坊っちゃんと協力して、「のだい」たちを懲らしめる「山嵐」はどんな人だろうか？ふとお能ちゃんは授業で聞いた話を思い出した。

戊辰の役で薩長にさんざんにやられた会津であったが、会津藩の家老を務めた保科頼母と言う人物がいた。皮肉にも薩摩藩ゆかりの人物で会津藩時代は西郷頼母と名乗っていた。西郷頼母は戊辰戦争後一人の孤児を養子にした。その名は四郎。西郷四郎は成長すると東京に出てきて嘉納治五郎に見いだされ講道館に入り柔道を学ぶ。

姿三四郎のモデルになった人物だ。姿三四郎の代名詞ともなった得意技は「山嵐」。この西郷四郎がよく出入りしていたのが夏目漱石の家で、漱石の作品「三四郎」も「坊っちゃん」に出てくる教師のあだ名「山嵐」もこの男に由来している名前だ。だから坊っちゃんの中で、教師山嵐は会津藩の出身になっている。

思い立ったらすぐ行動に移すお能ちゃんなので、家族に相談もせず愛媛県の学校に手紙をしたためていた。

よもや女教師など採用するまいと半分諦めはあったが、兵役に取られてしまう男教師より、女性教師の方が長く島に居ついてくれるだろうと採用！の通知は電報で届いた。

事後相談のようにことが決まってから家族会議にかけられることになった。

「いいんじゃないの。そうよ、瀬戸内の小島で子供たちに野球を教えるの。きっと後世にその女性教師の映画ができるわ！きっと、偉い美人女優が主演でそのモデルがわが娘。いいじゃない。」

ものすごく飛躍した理由で母親は大賛成だった。

「愛媛と言えば干物とミカンか。日露戦争で活躍した秋山兄弟も愛媛県だ。いいね。」父親も賛成。

「部屋は僕一人が独占して使っていいんだね。それなら大賛成。」

誰一人異を唱えず、離島について気にすることなくお能ちゃんの愛媛行きは決まってしまった。

卒業シーズンを前に卒論を通過した屋島君は卒業式を待たずに満州に赴き、満州鉄道に入社してしまった。

安徳君は卒業式の後、国の研修を得て国土地理院に入るようになった。

加奈子には何もなかった。いくつも舞い込んでくる見合い話を断って、与一君の連絡を待っていた。卒業後は幼児の教育に携わりたくて資格をとってはいしたが、柳沢伯爵が「待った」をかけてしまったために、日々花嫁修業の習い事ばかり繰り返し返す毎日になってしまったのだ。日舞・茶道・華道・香道・柔道・合気道。自分の人生が籠の鳥に思えてならなかった。

その頃、与一君は上海にいた。

揚子江を上海北部から蘇州まで英国ではバンドと呼ばれた共同租界地が続いている。英国、日本、米国、ニュージールランド、オーストラリア、デンマークなどがこの共同租界と呼ばれる地域に職員を置き、管理していた。共同租界の少し南にはフランス租界があり、フランスが一国で管理していた。

中国でありながら中国人が勝手に立ち入れない異国であったが、この時代、中国は国として成り立っていない状態であった。中国人はこの地域を外灘(ワイナン)と呼んでいた。

各国の思惑が飛び交う租界で与一君は夜な夜な怪しいキャバレーに出没していた。

「旦那。なかなかいいお召し物を着ていなさる。お見受けしたところテーラー&ロッジの生地ではございませんか？」

得意の英語を生かして与一君が接近したのは工部局に勤務する英国の領事だった。

「ほう、目が肥えているね。ということ、君は？」

「あつしですか？あつしは横浜で仕立て屋をやっていた与一つつうもんです。日本じゃ不景気で食つていけなくなつてね。上海まで出稼ぎに来たんでさあ。それより旦那、フィンテックスの上物の生地が入っているんでさあ。マーチャント物(商人物)が御嫌いとおっしゃるんです。ら、サヴィルクロフォードなどのミル物もそろえてますぜ。」

ちなみに、生地の製造から販売までをやっている会社をミルといい、自社の趣向にあつた生地を買い付けてきて売っているのがマーチャントと言う。

つい一年前まではあまりの身だしなみのひどさにお能ちゃんたちに着物や袴を見立ててもらっていたのに、わずかの間に高級生地を一目で見抜けるまでに成長していた。

フィンテックスの生地と言われて食指が動かない英国紳士はいない。

「こんなところにも我が国の生地が入るのかね。」

「英国の生地は世界一でございます。日本ではゼニアなどのイタリア物しか入らねえ。時世になつちまったもんで、まあ、見限つて出て来たつて次第でさあ。」

英国紳士にとつて与一君の西海岸訛りの英語はこのくらい下品に聴こえていた。

仕立て屋を装い欧米の職員に近づいては工作活動をするのが与一君の任務であった。

英国領事に取り入ることができた与一君は後日工部局の英国事務所に顔を出すことになった。フルオーダーの仕立物は仕立てあがるまで五〜六回試着をするので、その都度事務所や自宅に出向くことができる。工作人員にとつては優位な仕事だった。

「いい仕事ができそうじゃないか。一杯おごつてくれねえか。」

店がお開きになる頃、キャバレーのバンドでトロンボーンを吹いていた男が近寄つてきた。実は与一君の先輩で東京音楽学校で管楽器を学んでいたダニー・啓と呼ばれるジャズマンだった。

「マティーニでいっすか？」

「ガチョーン！今日はバーボン・ダブルでもらおうか。これ、今度新しく作曲した曲なんだ。」

と、ダニー啓は譜面を開いて見せた。

「いい歌じゃありませんか。」

「そうだろ。」

譜面に書かれている音符は暗号で次の指令を表していた。

「そうだ、お礼にハンカチをプレゼントしましょう。僕の手作りです。」
「ハンカチなんて、女の涙を吹かせるような物、縁起でもねえ。でもせつかくだ。貰っておくよ。」

キャバレー・サンケイは須田のオジキと呼ばれる日本人が経営していた。どう見ても怪しい業界の顔つきだが、元々は新聞記者だった。日華事変の取材に来てそのまま上海に居ついて商売を始めてしまった。

軍の関係者もよく顔を出していたが、兵役にもつかず異国で仕立て屋などをやっている与一君を蔑んだ目で見ていた。むろん、彼らは与一君が特命を帯びて大陸に渡ってきた将校だとは露ほどに思っていないかった。

軍の関係者が来ると、与一君をそつと裏口から逃がすが須田のオジキの気配りだった。

不器用で何事も不得手と思っていた与一君だが、仕立ての腕は見事なもので自分でも驚いていた。元々凝り性でのめり込む性格なので、仕事が始まると集中力が並大抵ではない。この日も米軍の海軍将校に依頼されたブレザーを仕立てるために徹夜を覚悟していた。

深夜なのに店のドアを叩く音がして集中から覚めた。カーテンから覗いてみるとベレー帽の男の顔が見えた。日本人らしい。憲兵隊ではなさそうだとドアのカギをあけると、チェック柄のスーツを着た小柄な男が飛び込んできた。

「後生だ！しばし匿ってくれ！」
ほどなくもつと力強くドアを叩く音が響いた。

「開けろ！開けないとためにならぬぞ。」

与一君はとつさに裁断テーブルの下に作った扉を開けた。

「なんですか？こんな時間に。今開けますよ。お待ちください。」

男が入るのを待つて蓋を閉めその上に足で反物の箱をずらした。

与一君がドアをあけると軍服の男たちがなだれ込んできた。

「今誰か逃げてこなかったか？」

「今日は一日ここで仕立て仕事をしてましたが、客も誰も来ませんでしたよ。」

「隠し立てすると痛い目にあうぞ。」

と、ぞんざいに今しがたまで作りかけていた背広の生地に触れたので

「何をなさる！これは今西中佐のお召し物ですぞ！」

兵隊たちは凍り付いた。

何かの時はこの名を出せばよいと教えられていた名前で、どうやらこのあたりを統括する大隊の将校らしい。実は米軍将校のブレザーなんだけど。

「こんな時間に明かりがついているのはお前の所だけだ。早く消灯せよ。」
そういうと兵隊たちは立ち去って行った。

「もう大丈夫だよ出ておいで。」

与一君は床の隠し扉を開けて中に潜んでいた男を引っ張り出した。あ、この人男性の姿をしているが女だ！」与一君はすぐに察した。

野暮な朴念仁に見える与一君であったが野暮な奴ほど女の色香にや敏感でございませぬ。

わかつていても何もできない野暮な男の悲しさでもある。

「お嬢さん。どうなさったんだそのケガは？」

左の肩から肘にかけて刃物で切り裂かれた怪我をしていた。分厚い生地 of 男物のスーツ着ていたから傷は浅かったが、肩が出ているチャイナドレスのような物を着ていたら命取りだったかもしれない。

「何故女とわかった？まあよい、医者と呼ばんでくれ。大丈夫、このくらいの傷など。」と、起き上がろうとして意識を失ってしまった。

与一君はこの男装の令嬢を二階の部屋に連れて行きベッドに寝かせた。陸軍中野学校で簡単な医療知識を学べたことに感謝した。キシロカインなどの麻酔も持っていた。裁縫には自信がある。

切り傷を素早く縫い、下の階からサラシ布を持って来て手当をして、どきくさに紛れて胸やお尻も触つちやっただけど目を覚まさなくてほっとした。

下の階の店に戻り、血痕の跡などをふき取りながら、「もしかしてあの女性は川島芳子ではなからうか？」と考えた。

「川島芳子が起こしたと言われる第一次上海事変は昭和七年。だとしたらいったい何歳なんだ？」

そんな難しいことは一切考えていない作者であった。なんなら日野富子をこの時代の上海に登場させることもできるけど、そんなことしちやったらたら話がもつとややこしくなるでしょう。だから、そんなもんだ。程度で時系列は受け止めてください。

「御亭主。昨夜は世話になった。」

午前十時を回った頃、川島芳子がふらつく足取りで階段を降りてきた。

「お嬢さん。無理しちゃいけません。まだ外には憲兵がうろろろしています。今出て行ったらみすみす捕まりに行くようなもんですよ。」

「しかし、それでは君に迷惑がかかるだろう。」

「迷惑だなんて。この租界に住む者にとっちゃ毎度のことですよ。それより、切り裂かれた服はもう使えません。今、お嬢さんのシャツとブレザーを作っているところです。ハリスツイードの丈夫な生地ですよ。」

「お嬢さんと言うのはやめてくれ。君は僕より若いみたいだし、僕は男として生きているつもりだ。」

「それなら」お兄さん」どうです。お兄さん。朝飯ができてます。今部屋に持っていくから上で待っていてください。」

日本にいた時にこのくらいさばけていたら与一君は野暮とは呼ばれなかっただろうが、後悔役に立たずである。

何があったか知らないが、国のために身を犠牲にしてきた川島芳子が何故切り付けられ日本の憲兵に追われるのか？興味もあったが、明日は我が身に降りかかるとも言い切れない。思惑と思惑が飛び交う街、上海だ。

「きんぴらごぼうとオカラです。日本租界だから手に入る材料です。」

中野学校の実習で十八番料理になった総菜だった。

「僕はこれから仮縫いのために工務部に出かけてきます。もし誰か連絡を取りたい人がおりましたら、ひとっ走り行ってきます。」

「何から何まで世話になつてしまい申し訳ない。」

「もし誰かが入つてくると鈴が鳴るように仕掛けてあります。いざという時にはこの壁をひっくり返すと……こうして外に出られるようになっていきます。」
壁に作つたどんでん返しを試しながら与一君は説明をした。

「こんな仕掛けをしているところを見ると君はやはり……いや、今は問うまい。ちよつと距離はあるがフランス租界との境まで行つてもらえるだろうか？」

川島芳子は自分でも不思議なくらい与一君に心を許していた。警戒心を持たせない。中野学校の人選は見事であった。

「私の役目は終わろうとしているのかもしれない。」

与一君が部屋を出る時に川島芳子がぼつりとつぶやいた。

「それならあなたの仕事に対して報わなければならぬと思います。」
振り返つて一礼して与一君は家を出た。

仮縫いの試着を住ませた与一君はフランス租界との境にある漢方薬品の店に向かった。中国人が入れない租界であるのに中国人の経営している薬屋だった。

「私中国人ないあるよ。香港人あるよ。それよりお兄さん欲しいは薬か？ 勃つ！」
そう言つて右手を下からグイつと突き上げた。

「そうじゃないよ。この人を……。」

「みなまで言うな！ 私なんでもわかるよ。中国三千年の歴史！ これか？ 勃つ！」
また右手を下からグイつと突き上げる。

「だから……。」

「私、陳さん。義和拳の使い手。鉄砲、私の体あたつても死なないよ。これ！ これ！ 勃つ！」
右手を下からグイつと突き上げて聞く耳を持たない。

義和拳とは十九世紀末に起きた義和団の乱の時に不死身の肉体を身に着ける宗教のよくな妄想に憑りつかれた拳法で、鉄砲に向かって飛び込んで行つては皆射殺された惨めな拳法である。

とんでもないところに来てしまった。一度あきらめて帰るか？ と振り返ると、長いチャイナ服を着たスキンヘッドの男が立っていた。清国の末裔？ でも辮髪はなかった。

「日本人だね。何か用かね。」

しつかりした日本語を話す男だった。満州国の人だろうか？

「ある人にごに来てシヨウ・チャンツーと言う人に会うと言われました。」

「私そのシヨウ・チャンツーと言うものだが。」

与一君は川島芳子に手渡された手紙を渡した。それは満州文字で書かれた手紙で、与一君も教わっていない文字であった。

「彼の傷はどんな具合なのかね？」

シヨウ・チャンツーが「彼」と呼んだことが不思議な気がしたが、怪我の状況を伝えると、

シヨウ・チャンツ―は店にある漢方薬を何種類かきんちやく袋に詰めた。

「陳さん。私はこれから出かけるから店を閉めるよ。あなたも家に帰りなさい。」

「この店の人ではないのですか？」

「近くに住む軽いキチガイだ。気になさるな。」

陳さんはアツパーカットのようには右手を下から突き出しながら「勃つ！」を連呼しながら通りに向かって歩いて行った。

「白蓮教の末裔だ。槍で突かれても鉄砲で撃たれても死なないと思っている。国を蹂躪されて屈辱にまみれた支那人が作り上げた妄想だ。」

店を閉めて通りに向かって歩き出したとたん、急ブレーキの音と何かが踏みつぶされるような音がした。

通りに出た陳さんがアメリカ人のT型フォードにひかれた音だった。即死だった。中国三千年の歴史もアメリカの大量生産の工業力の前には虫けら同然だった。

「見なかったことにしよう。」

そういつてシヨウ・チャンツ―は人力車を停めた。

陳さんをひいたT型フォードから下りた運転手は、「チャイニーズ」と一言言って立ち去ってしまった。

やがてどこからか湧いてきた中国人によって、陳さんは身ぐるみはがされ、その遺体は揚子江に流される。国がなくなると言うことはこういうものだった。

「万が一、日本が負けたらこんな状態になるのでしょうか？」

与一君は人力車の中でシヨウ・チャンツ―に聞いた。

「ならないよ。日本人は底辺の力が違う。根本的に連中とは違うんだよ。」

見てくれは中国人を装っているが、この人は日本人ではなからうか？与一君にはそう思えた。満州国の人間だったら辮髪を結っているはずだがこの人にはない。いや待てよ。辮髪結うほど髪の毛がないのかもしれない。できれば自分も辮髪を結つてみたいけど、この硬い髪の毛のできるのだろうか？そんなことを考えているうちに日本租界の与一君の店の近くまで来た。

二人を乗せた人力車を追いかけて来る青年がいたが、人力車を追い抜き走り去っていった。秋田から上海に商売に来ていたネロさんであった。

念のため、ひとブロック手前で人力車を下りた二人は、憲兵の目を気にしながら店に戻った。

川島芳子は眠っていたが、気配を感じて目を覚ました。

「起きなくていい。大変な目にありましたね。」

「この御亭主にはお世話になりました。命の恩人です。」

「まずは傷口をお見せなさい。」

と包帯をとって縫合跡を見たシヨウ・チャンツ―は全てを察した。

「どうやら彼は私と同業者みたいですね。心配はいらない。」

なるほど、藤原さんはいい人選をしたものだとしヨウ・チャンツ―は思った。

「僕はこれからお兄さんのシャツとブレザーを仕立てますので、下に降ります。襟のあわせは右上がいいですか？左上がいいですか？」

「左が上に決まっているじゃないか！ははははは。」
与一君はドアを閉めて店に下りて行った。